

学習不適應生徒についての一考察

— 不安要因の除去を中心に —

直江津市立直江津中学校教諭 上野正靖

I 主題設定の理由

現在、中学生の進学意識は、外部からの刺激からだけでなく、個人の内部欲求のうえからもかなり強度である。しかしながら、現実の学習場面では学力の高い者も低い者も、その意識がかならずしもより好ましい状態で顕現されているとはいえない。換言すれば、目的意識と行為の不一致をきたしている場合が多い。生徒はその谷間で悩み、あせり、とまどい、などを感じ、精神的に不安定な状態になっていると思われるのである。しかも、学習の場が、一日の学校生活の中で大部分を占めていることや、非行への逃避口となる危険性のあること等を考えあわせると、学習不適應の問題は重大である。それだけに、早期にその障害となる要因を個々の生徒に即して究明、除去し、学習場面において自己実現できるようにすることが急務であると考えらる。

II 研究の方法

1 研究の対象

この研究であつかう対象は、① 能力に応じた学習ができない者 ② 能力以上に学習効果をあげておりながら学習不適應の要因をもっている者とした。そしてAAI（学習適応性検査）の結果特に精神・身体の健康に問題のある生徒を2学年1学級の中から男1名、女2名を抽出した。

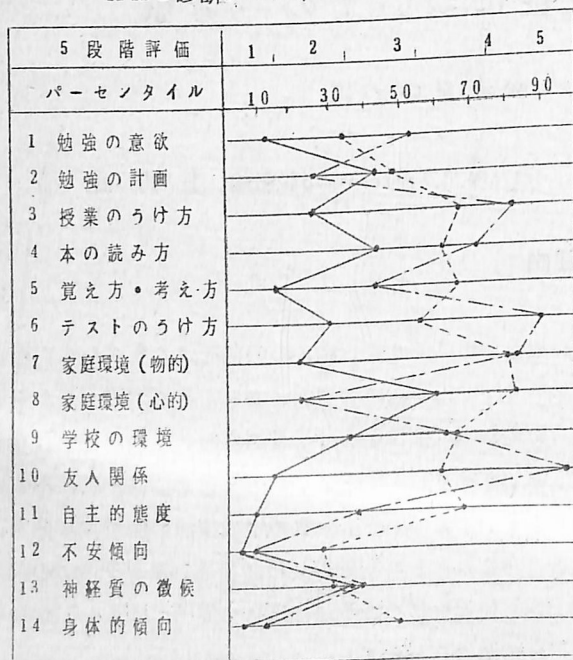
2 検査および調査

知能検査、標準学力検査、AAI、DAI（適応性診断検査）、交友関係調査を実施する。中でもAAI、DAIでは、一般的な基準からみた傾向と個人内の具体的な問題の双方から診断し、相談活動に活用する。なお検証資料として、AAI、学力テスト、交友関係調査を実施する。

III 結果と考察

1 諸検査について

AAI 診断プロフィール



(A男——, B子-----, C子-----)

DAI パーセンタイル

	A男	B子	C子
H ₁	99	63	99
H ₂	69	80	80
H _?	71	14	36
S ₁	42	99	52
S ₂	38	69	70
S _?	78	4	11
P ₁	22	80	55
P ₂	17	47	28
P _?	70	47	66
M ₁	15	89	55
M ₂	15	79	28
M _?	57	4	66
U	4	99	99
I _n	17	90	40
E _x	39	59	80

(1) A男の場合

- SS54, 新成就値-8
- 父母健在, 自家営業。姉2人, 兄1人, 両親は多忙の中を本人の遊びや話し合いの相手になったり, 励ましたりする。
- 自律性, 注意集中力, 持続性に欠ける。
- 交友の面で, 気になって勉強が

手につかない。友人間の激励や競争がなされていない。

- 不安傾向として注目したいのは, 将来に対する心配, 思いどおりにならない場合のいらいらした感情の度合いが強いことである。このことは, かぜをひきやすく, 胃腸の弱いこと, 学習意欲の低調なことと関係がありそうである。
- Pr-scaleでの異常性は健康との関係を示している。

(2) B子の場合

- SS48, 新成就値-9。• 両親共稼ぎである。兄は東京の大学へ行っており, 日常生活では事実上のひとりっ子である。父親は比較的温和な人柄であるが, 母親は明朗かつ達, 教育に熱心である余り, 勉強のことでやかましく言う傾向があり, 本人は勉強するのがいやになることがよくあるようである。• 不安傾向として, 特に「毎日勉強のことが気になり, あせったり, いらいらすることがある。」が目立つ。また神経質の徴候として「悪い夢をみてうなされることがある。人前にでると胸がドキドキする。」とのことである。• その他友人と問題を出しあうことがない, など消極的な面がみられる。

(3) C子の場合

- SS64, 新成就値+9。• 祖父, 父ともに会社役員。母, 妹1人。問題点は「親が学習のことでほめたり, 激励することがない。友人をつれてきても喜んで迎えてくれないであろう。」と本人が反応を示していることである。• 不安傾向としては「将来のことについて心配である。自分の体に自信がなく, いつも気にする。」があらわれている。• その他, 人前にでることへの憶病さ

起床時の不快感，自己の能力に対する不信，心配性がみられる。

2. 実践の経過

(1) 面接にあたっての留意点

- ① 出会い関係をたいせつにし，資料にこだわらず，生徒の気持ちに即しながら相談活動をすすめていく。（この3人とも学級担任になるまで顔も氏名も全然知らなかった生徒である）
- ② 話し合いの中で結論を迫られても，いくつかの情報を提供するだけにとどめ，生徒みずからが主体的に解決していくようにする。
- ③ 教科ごとの学習方法，問題内容等具体的なものについては該当教科担任との相談をすすめるようにしたい。
- ④ 必要に応じて親との面接を実施し，協力するようにする。

(2) A男の場合

① 第1回（定期相談） — 6月中旬 —

面接カードには「勉強は1日にどの位やればよいか」が記されていた。Aの話では「テレビをみたり，家族と話したりして，勉強をはじめるのは22時から。それもぼやっとしている時が多い。ねむくなってすぐやめてしまう。」とのことである。結論的には，家族との対話のすばらしさを強調しながら，2～3の例を示して，どのようにして学習の時間を有効に生み出すかを本人なりに考えさせることになった。

② 第2回（呼び出し相談） — 6月下旬 —

「先生，僕どこへ進学できるだろう。姉は普通科にいつているし，今の成績ではどこへもゆけないと言われるし。」と訴える。将来の進路について，姉の勉強にも刺激され，一種の焦燥感と恐怖感を抱いているようである。陽気で多少甘ったれたところのある生徒だけに，深刻な内面的かつ藤がひしひしと伝わってくる。終始，聞き手にまわる。

7月上旬に，この問題で話し合い，少しずつ気持ちの整理がついてきたようである。

③ 第4回（自発来談） — 7月中旬 —

「成績，悪かったでしょう。」といつてきた。ずっと考え続けてきたが，勉強に身がはいらず困ったとのことである。「テストの結果が悪いので，かえって気持ちが落ち着いた。くよくよせずに自分なりにがんばることが先決問題だ。」という。

④ 第5・6回（呼び出し相談） — 7月下旬・9月上旬 —

夏休みの計画表の検討と反省を行なう。実践は，目標の半分しかできなかったとのことであるが，長期休暇にそれだけ遂行したことをほめ，激励し，自信をもたせるようにした。

⑤ 第7回（呼び出し相談） — 9月上旬 —

早退した翌日，体の具合を尋ねる。治療法として放課後仲間と砂浜で体力づくりをやりたいという。その副産物として，隔日に図書館で共同学習をするようになった。

⑥ 第8回(呼び出し相談) — 9月下旬 —

全校学力テストを控えて、目標を明確化し、学習方法を考えさせた。そして心の集中訓練、暗示文のくりかえし等の自己暗示法をすすめた。

⑦ 交友関係調査による集団再構成 — 6月・10月 —

勉強のことで、友人と励ましあったり、競争しあうことがないということから、相互選択ではないが、本人の選択した真面目で親切的成績上位の生徒と同一班にし、バズ学習させることにより、刺激を与えることにした。(9月には相互選択になる)

(3) B子の場合

① 第1回(定期相談) — 6月下旬 —

「勉強のやり方」について話し合う。本人の生活規制は20時～22時まで睡眠、22時～2時まで学習、2時～7時まで睡眠である。「学校にきてもやや疲れるし、頭がすっきりしない。先生にかけられると汗ばんだりする。体操クラブはどうしてもやりとおしたい。」という。結果は「睡眠時間を継続してとるために、効率ある学習をする。帰宅したらその日の学習内容を勘案して大体の時間割を作成し、時間内に終わらせるよう努力することになった。本人のたてた計画は22時～1時であった。教科の学習法については、教科担任と相談するようにすすめ、両者間をとりもつことにした。

② 第2回(チャンス相談) — 7月上旬 —

週番としての連絡をしにきた時をとらえて話し合う。「決めた時間内に終わらせるようにしているがなかなかうまくいかない。期末試験の準備もあるので。しかし、ぼやっとして過ごす時間は少なくなった。」という。そのついでに教科の質問をして帰っていく。

③ 第3回(自発相談) — 7月下旬 —

廊下で呼びとめられる。「先生、ありがとうございました。」という。雑談しながら相談室にはいる。「最近、気持ちがすっきりする。1日の時間動のことで、級友におしえたら、うらやましがられた。時間の無駄ってこわいものだ。学習時間が短縮されたので、母が心配している。」と楽しそうに語っていた。

④ PTA — 7月下旬 —

母親が自分の学生時代の成績をあげ「その子だからお前もできるはずだ。努力が足りない。」と本人によく言うのだそうである。そこで、兄との比較、親との比較が本人の過重負担となり、学習への集中力がそこなわれ、意欲の減退をもたらす原因になること、むしろよき協力者になってやること等、具体的に話し合う。特にAAIの結果から「よくほめてあげているようですね。」と伝え、いっそう本人に対して共感的理解のできるように進めた。

⑤ 第5回(呼び出し相談) — 9月上旬 —

保健班としての衛生検査の発表をほめる。その時の気持ちのことから、クラブ活動での選手のあり方に発展する。話題の中心は「自信と度胸」である。

⑥ 第6回(呼び出し相談) — 9月下旬 —

学力テストに備えての話し合い。(ほぼA男の場合と同様)

⑦ 交友関係調査による集団再構成 — 6月・10月 —

A男の場合と同様の方法をとる。

(4) C子の場合

「家庭とクラブ」の問題を提起する。「脚の関節が悪かったため、クラブに2か月以上参加していない。とり残されそうで心配である。日曜日にもクラブ活動があり、内規がきびしいのに、母は日曜日ぐらゐは家にいるようにとうるさくいう。全然理解してくれない。」と訴え、母に認めてもらうように話してもらいたいという。C子の場合、脚とクラブに主な不安傾向があったようである。そしてクラブ活動への参加が円滑になり、生きがいを感じるにつれ、体のスタイルにひけめを抱いていたのが、「スポーツをしてスマートにするから」と笑ってすますようになった。しかし、相談を重ねるにつれて家庭内の本人の位置が不安定であるのがわかった。両親と本人との間に対話が少なく、しかも機械的なものである。

PTAで、本人の家庭での生活態度にふれながら、妹だけでなく本人も仲間に入れ、肌のふれあいをおして対話を進めるよう依頼した。最初はなかなか自然にいかず、ちゅうちょしたそうである。そしてたまたま、本人が盲腸で入院したことがさらに母子の対話を促進させるもとになったことは不幸中の幸いであった。

3. 実践の結果について

(1) 資料

① A A I パーセンタイル

	A 男		B 子		C 子	
	5月	10月	5月	10月	5月	10月
1	11	26	38	65	51	89
2	37	63	50	76	27	63
3	27	52	67	67	80	80
4	37	37	61	63	73	73
5	12	20	64	64	42	54
6	29	68	54	68	91	84
7	21	40	77	77	77	88
8	59	72	81	89	24	72
9	36	75	64	75	64	75
10	13	56	56	56	97	97
11	10	37	66	66	37	37
12	5	58	27	68	11	79
13	36	50	28	50	36	62
14	6	40	51	51	14	40

② 学習成績パーセンタイル順位

	1 年	中 間	期 末	模 擬	中 間
A 男	18	17	15	32	30
B 子	18	21	29	27	28
C 子	75	79	91	87	89

③ 交友関係調査

	月	PVR	NVR	MPV	MNV	ISSS
A 男	5	7	6	2	1	0.19
	9	6	1	3	0	0.36
B 子	5	5	0	3	0	0.36
	9	6	0	4	0	0.47
C 子	5	2	0	1	0	0.12
	9	4	0	2	0	0.25

(PVR : 被選択数 NVR : 被排斥数)
 (MPV : 相互選択数 MNV : 相互排斥数)
 ISSS : 社会測定の地位得点指数

(2) 考察

① A男の場合

現在をより堅実に歩もうとする態度の変容と、友人との体力づくりと学習が、種々の面に好結果をもたらしていると考えてよからう。特に、友人関係で「いじわるをするから、いやみをいうから」との理由で排斥していたものの数が減りはじめたことは望ましいことである。しかしながら、学習意欲の面で認識傾向と反応傾向の不一致がみられること、記憶、思考の面で不適応の徴候があることは学習への耐性・自覚の欠乏の現われと思われる。

② B子の場合

親子関係や計画・実践に対する自己充実感から学習意欲が高まり、注意の集中ができるようになって、わずかではあるが学習の効果がみられる。また、学級内に占める位置が中心的存在になっていること等が将来への心配とすりかえられた感じがする。特に、不安傾向の中で好ましい意識の変容のあったのは「失敗後反省によってさっぱりできる」「身体上の劣等感」のところである。

③ C子の場合

親子の人間関係の改善が学習に、スポーツに楽しい生活をもたらし、それによって、不安がとり除かれ、急激な学力の向上がなされたものと考えられる。

④ 総合的に

3人に共通していえることは、⑦相談活動が定期相談を契機に進展したこと。④生徒自身が自分の問題として積極的に取り組む姿勢のあったこと。②スポーツを好み、気分の転換をはかれたこと。⑤生徒をとりまく環境が能力以上のことを要求せず、本人の人格を尊重するようにつとめたこと。④自己充実・自己拡大の欲求が満たされることによって、柔弱性がなくなってきたこと、等である。

おわりに

不安の要因は学習者自身に属する主体的なものと、環境的なものの複雑なからみ合いの中にあるものである。したがって、教師は指導意識を抑制し、生徒の直面している問題を糸口として、相談活動をすすめるべきである。と同時に学級経営の生きた実践の場面でのようにしてひとりひとりの生徒をいかし、生徒自身に自己の存在価値を認知させ、自己実現の方向にもっていくかを配慮しなければならない。

この研究は、一学級担任として最少限度の資料をもとに、不適応の情意的要因の除去を中心に、学習態度の高揚や人的環境の改善等を手段としてすすめてきたものである。そして、いくつかの問題点を残している。①検査・調査はその時の生活状況や意識によって変わるものであるから、資料そのものが検証に適しているかどうか。②情意的なものは一般に急激な改善を望みえないものであるから、生徒の変容の維持・向上が果たして可能かどうか。③学習不適応の要因が数多く個人内に残されていることなど。今後さらに生徒の歩みの中で研究をすすめていきたいと考えている。